「スケールのパフォーマティヴィティ」と ストラスブールの大モスク建設 —アクターの言説実践に着目して—

佐 藤 香寿実 *

(2018年12月18日受付, 2019年11月9日受理)

I はじめに	2 モスクの概要と建設経緯
II 先行研究の検討と本研究の理論枠組み	IV モスク建設におけるスケールの表象と効果
1 ヨーロッパとフランスにおけるイスラームをめぐる議論	1 建設アクターによる「スケールの政治」
2 社会的に構築されるものとしての「スケール」	2 モスクの物質面に対する影響
III ストラスブールの大モスクに関する概要	V 経験されるモスクと言説の再構築
1 調査地の概要	VI おわりに

摘 要

本稿の目的は、フランス、ストラスブールの大モスクの建設過程およびその利用を通じて、言説実践としてのスケールがいかに実質的な効果を生み出したのかについて、「スケールのパフォーマティヴィティ」の観点から論じることである。同モスクは、ライシテ（非宗教性の原則）が重要視されるフランスにありながら、異なる制度を持つアルザス・モーゼル地方法を活用し、地方公共団体からの資金援助を受けて2012年に建てられた。本稿では、人文地理学で発展してきた社会構築主義的な「スケール」視角に依拠し、スケール言説がモスクの建設過程および物質性にいかに関与したか、またモスクの利用を通じて新たなスケール言説がいかに再構築されているか、インタビューで得た語りを引用しながら分析を試みた。分析において、アクターや状況に応じて登場する複数のスケールが、「ここ／よそ」の区別に結び付けられていること、さらにスケールの言説実践を通じて、「ここ／よそ」の境界は絶えず問い直されていることが示された。

キーワード：言説分析、スケールのパフォーマティヴィティ、アルザス・モーゼル地方法、モスク建設、ストラスブール

* お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科・院生、日本学術振興会特別研究員 DC
E-mail: kazumi.sato61@gmail.com

The 'Performativity of Scale' and Construction of the Grand Mosque in Strasbourg: Focusing on the Actors' Discursive Practices

SATO Kazumi

Graduate student, School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University; JSPS Research Fellow

(Received on 18 December, 2018; Accepted on 9 November, 2019)

Referring to a 'performativity of scale' approach, this article aims to describe the way in which scales, as discursive practices, produced substantial effects during the construction process and utilization of the Grand Mosque of Strasbourg, in France. This mosque was established in 2012 by taking advantage of Alsace-Moselle local law allowing religious communities to obtain public financial aid, while located in France, the very soil of *laïcité*. Based on the constructionist perspective of 'scale' developed in human geography, I attempted to analyze, by quoting interview records, how scalar discourses influenced the process of the construction and the material aspects of this mosque, and how scalar discourses were reconstructed throughout utilization of the mosque. The analysis showed that various scales were linked to the distinction of here / elsewhere, and that their borders were continuously contested in the discursive practices of scale.

Key words: discourse analysis, performativity of scale, Alsace-Moselle local law, construction of mosques, Strasbourg

I はじめに

2019年1月のニュージーランド、クライストチャーチでのモスク襲撃事件は、西洋社会における反ムスリム感情の根強さを印象付ける事件として、世界中に大きな衝撃を与えた。犯人の思想背景には、「大置換 *grand remplacement*」という考え方が影響を及ぼしていたことが指摘されている。フランスの知識人ルノー・カミュによって提唱されたこの理論は、「移民出自の非西洋人が、圧倒的な数の力をもって歴史的な西洋人と入れ替わり、民族の置換が起こる」ことを予測している。科学的論拠に乏しく、西洋が乗っ取られるという恐怖心をむやみに煽るこの見解を、大手メディアは「陰謀論」として一蹴するが、匿名性が担保されるインターネット上では支持する書き込みも多く、実際の影響力は計り知れない。フランスでベストセラーとなった小説『服従』も、この理論を彷彿

させるような筋書きになっており、近未来のフランスが、ムスリムの大統領の主導により、イスラーム法治国家へと変貌する様子を描いている（ウェルベック, 2015）。

Liogier (2012) は、これらに代表されるような「イスラーム化の神話」が構築されるメカニズムに着目する。彼は、ヨーロッパにおける「イスラーム化」への恐怖は、しばしば社会に向けた「正当な自己防衛」の呼びかけとして現れ、実際に人種差別やイスラームフォビアを引き起こしていることを指摘する。このような「自己防衛」は、マッシー (2014) が批判するような固定的で閉じた空間／場所理解によって生じているように思われる。彼女は、今日支配的な地理的想像力のもとでは、場所の「真正性」がグローバリゼーションにより危機に瀕していると捉えられ、その結果、場所の防衛反応が生じていることを指摘する。モスクなどの異質性をもった可視的空間が西洋の都市

景観に出現することは、伝統的な場所に対する挑戦として捉えられがちであるが、そこでは、ムスリムは場所の「真正性」を脅かす存在として他者化されてしまう。この固定的で閉鎖的な場所の想像力を根拠とする排他主義が、「イスラーム化の神話」成立の背景にも存在する。つまり、「イスラーム化」という想像力は、「グローバリゼーション」に対するそれと同じように、国民国家や地域という領域空間の固定性、不変性、あるいは均一性を前提とすることから生じるのではないか。

このような異質なものの排除に繋がりがねない場所の本質化から脱し、現実の場所の複雑性および動態性を明らかにするために、人文地理学で発展してきた社会構築主義的な「スケール」概念に目を向けることが有意義であろう。「グローバル」や「ローカル」の本質化に抗い、固定的なスケール観に挑戦してきた社会構築主義的なスケール理解に依拠することで、単なる「大置換」では生じえない異種混雑性が現前している様子を示すことができる。

本稿では、多様なスケールの「混雑」が見られる場所構築の例として、ストラスブールにおけるモスク建設という具体的事例を取り上げたい。フランスでは政教分離原則「ライシテ」（「非宗教性の原則」と訳されうる）¹⁾の影響で宗教団体に対する直接的資金援助が原則禁止されているにもかかわらず、「ストラスブールの大モスク」は、地方公共団体からの直接的資金援助を受けて2012年に完成した。この資金援助は、ストラスブールが属するアルザス・モーゼル地方に特殊な政教体制が敷かれていることから可能になった。筆者は本事例に着目し、2012年から2014年にかけて、

モスクの建設過程や利用実態に関する現地調査を行った。調査を通じて気づいたことは、関係者の語りにおいて空間的なコンテクションが多分に含まれており、さらに、それらのコンテクションは、「グローバルなものの広大さから密接で小さなものにいたるまで」（マッシー、2014: 24）のあらゆるスケールを想起させるような多様性を呈していることであった。

そこで本稿では、社会構築主義の立場から、「スケールのパフォーマティヴィティ」（Kaiser and Nikiforova, 2008）の考え方に依拠し、スケールがモスクという場所の生成にいかに関わっているのか、言説実践に着目して分析する。調査で得た語りを中心に、モスク建設過程でいかなる「スケールの政治」が行われたか、様々なスケールがいかにモスクの物質的側面に影響を及ぼしているか、そして、モスクにおける経験がスケールをめぐる新たな言説の構築にいかに関与しているか、といった点について描き出すことを目的とする。

研究方法としては、文献調査、一次資料分析およびフィールドワークを用いた。一次資料として、雑誌、地元新聞、公的資料を利用した。フィールドワークに関しては、主に2012年9月～2013年6月のストラスブール大学への交換留学中に行った事前調査を土台にリサーチエクステンションを組み立て、2014年3月18日～3月28日および2014年8月30日～9月28日の本調査で行った、半構造化インタビューおよび参与観察の結果に基づいている。本稿では、建設計画に関与したモスク管理団体 GMS（ストラスブールの大モスク：Grande Mosquée de Strasbourg）の運営メンバー3名、建設委託運営会社担当者1名、およびモスクを日常

1) ライシテの多義的な性質について整理することは、本稿の射程外であるため割愛する。一般的には、ライシテは1905年の政教分離法によって立法化された、「脱宗教性／非宗教性」の共和国理念だと定義づけられる。王政と密接に結びついていたカトリック教会の国家への影響力を排し、宗教的に平等な共和国を確立するための闘争の中で発展してきた。政教分離法に加え、憲法第1条（「フランスは、不可分の、非宗教的（ライック）、民主的かつ社会的な共和国である」）や様々な国内法、国際条約によって裏付けられる憲法原則でもある。邦語文献では、法的概念としてのライシテの歴史については小泉（1998）に、社会通念および哲学思想としてのライシテについてはボベロ（2009）や伊達（2010）に詳しく論じられている。

的に利用する信徒7名(うち5名とはグループ・インタビューを実施)へのインタビュー結果を引用する²⁾。インタビューはすべて、フランス語で実施し、協力者の許可を得て録音し、書き起こしたものを日本語に訳した。

II 先行研究の検討と本研究の理論枠組み

1 ヨーロッパとフランスにおけるイスラームをめぐる議論

これまで、ヨーロッパやフランスにおけるムスリム移民と受け入れ社会の軋轢は、しばしば「スケール」の構造的な問題として分析されてきた。本節では、簡単に先行研究を紹介しつつ、フランスのムスリム移民をめぐる今日の状況がどのようにスケールと関わっているか考察する。

ヨーロッパ全体の風潮を説明する分析として主流なものは、欧州統合あるいは移民流入によってもたらされる国家の退場と、それに対する反発として移民が排除される、というものである。例えば、ヨーロッパの移民排斥問題について、山崎(2013)は、テイラー(1991)による地理的スケールの三層モデルに依拠しながら、まずグローバルな世界経済の「現実」として、先進国・発展途上国間の労働力および観光流動が存在し、先進国における外国人労働者・観光客とホスト社会がローカルな「経験」を構成した結果、ナショナルな「イデオロギー」を通して、外国人労働者のもたらす社会的「弊害」がホスト社会住民によって焦点化される、と分析する。同様に、Haenni and Lathion(2009)は、ヨーロッパでミナレットに対する反発が生じる理由として、グローバリゼー

ションやEU単一市場化によって危機に瀕する西洋アイデンティティが、イスラームの可視性によって問い直されていることを指摘する。つまり、西洋的国民国家に由来するアイデンティティが、EUや非西洋出身移民の存在によって揺らがされた結果、排外主義を生んでいると理解することができる。

とりわけフランスでは、マスメディアや政界の言説において、しばしば共和国の価値観とは相容れない性質を持つものとしてイスラームが表象されてきた。1989年のスカーフ事件を皮切りに、2004年制定の宗教シンボル禁止法、2010年のブルカ着用の禁止など、ムスリムをターゲットとした、公的空間における宗教性表出を禁止する政治的措置が取られてきた。この根拠として頻繁に持ち出されたのが、共和国原則としての「ライシテ」である。「ナショナル・アイデンティティ」としてのライシテが、ムスリムを「統合不可能」なものとしてスティグマ化してきたことは、多くの研究で指摘されている。例えば、Lamine(2006)は、スカーフ論争の過程で、「宗教的平等と中立性の法的装置」であったはずのライシテが、「フランスのアイデンティティの中心的場所」に位置するようになり、同時に、イスラームの可視性が脅威と見なされるようになったことを明らかにする。

排除と同時に、「ナショナル」なものへのムスリムの包摂も進んでおり、ヨーロッパ各国でイスラームを「ナショナル化」する政治的意図が見られる。フランスでは2003年に政府の肝いりで諸ムスリム団体の代表機関「フランス・ムスリム宗教評議会(CFCM)」が創設されたが、Laurence and Vaisse(2007: 168–169)は、この試みが「イスラ

2) 個人情報保護の観点から、本稿では関係者の名前はイニシャルで表記する。GMSメンバーのD氏・L氏・C氏は、いずれも50～60代男性、モロッコ出身ストラスブール在住のムスリムであり、建設計画の推進に直接関与していた。モスク建設事業を委託された会社の担当職員であるH氏は、50代のストラスブール出身の非ムスリム男性であり、市行政側とGMS側の調整役として計画に関与し、建設の経緯をよく知る人物である。信徒は、いずれもムスリムの女性であり、ストラスブール出身者(2名)に加え、モロッコ(3名)とセネガル(2名)の出身者である。

ムという宗教の『ナショナル化』を促進する」目的を持つものであったと述べ、イスラームを国家の制度的枠組みで統制できるものへと作り変えようとする企図が進行していることを示唆している。やはりこの背景にあるのも、「ナショナル」な統治機関の影響力低下に対する危機感であると考えられるだろう。「ナショナル化」が問題となるのは、世界中の信徒の広がりや「ウンマ」の概念に基づいて構想するイスラームの性質に由来すると推察される。実際、ヨーロッパのイスラームをグローバルな広がりを持つものとして捉えようとする研究も登場している（Roy, 2002; Cesari, 2009）。

さらに、フランスでは、国民国家の統一性は、下位レベルの集合体によっても脅かされるものとして想定されている。「フランスにおいて、外国出自住民の統合は、アメリカのように集合的ではなく、個人的になされる」（Schnapper, 1991: 93）と言われるように、フランスでは個人と国家の直接的関係を理想とし、宗教コミュニティなどの媒介組織の存在は社会の分裂をもたらす「コミュニタリズム」³⁾として忌避されることがある。イスラーム実践のためのグループ化それ自体が、「ナショナル」なものに対する脅威として受け取られかねず、ムスリム・アクターは常に「イスラームの伝統に則ったトランスナショナルな領域と、フランス的価値に基づいたナショナルな領域の間で舵を取らねばならない」（Bowen, 2010: 6）のである。

上記の研究群が示すように、ヨーロッパとフランスにおけるムスリム移民と受け入れ社会の葛藤は、「スケール」に関する社会領域変動の一端を担うものとして理解できる。その公約数的理解とは、以下のようなものであろう。すなわち、「グローバリゼーション」と呼ばれるような、移民流入や欧州統合という超国家的な現象と、異なる文

化的・宗教的コミュニティの発展という国家内部の運動によって、個人に対する国家の影響力が以前に比べて低下してきており、国家に依拠した集合的アイデンティティによってもたらされる社会的統一性に対する危機感が高まっている。その結果、異質なもの、あるいは国家の構成市民としての資格をもたないと認定されたグループや個人を排除するか、そういったグループや個人を国家の枠組みにはめ込もうとする動きが生じている。スケール構造への着目は、こうした「イスラーム化の神話」や「コミュニタリズム」への恐怖をつくりだす社会変動にアプローチするための有意義な観点を呈示しうる。

しかし、言説が現実を生み出すという社会構築主義の観点から考えれば、構造に着目することは、常に一定の危険をはらむ。イスラームを「グローバル」な存在と位置付けたり、移民を「ナショナル」なものに対置する見方を踏襲したり、現象をスケールごとに区切って分析したりすることは、スケールに結び付けられた既存の現実認識を、言説実践を通して再強化することに一役買うことになるまいか。むしろ、スケールの所与性を否定し、スケールが（再）構築される過程を明らかにする必要があるのではないか。以上の問題意識から、本稿では、社会的に構築されるものとしてスケールを捉える研究群に着目する。特に、次節で紹介する「スケールのパフォーマティヴィティ」という考え方は、既存のスケール認識を塗り替えるような実践に焦点を当てることを可能にするだろう。

2 社会的に構築されるものとしての「スケール」

本稿の理論的枠組みとして、人文地理学分野で発展してきた「スケール」概念に関する議論を整理しておく。特に1980年代以降、「グローバリゼーション」に対する注目が高まるなか、多くの地理

3) Dhume (2012) によれば、コミュニタリズムとは、普遍主義を基本とするフランスの「共和国モデル」への脅威となりうる共同体の内向性および閉鎖性を意味する、フランス国内に1980年以降に新しく定着した言葉である。政治家やメディアによって使われ、特定グループや個人の評判を落とす侮蔑語として機能する。

学者が地理的スケールを社会的に構築されるものとして再概念化することに尽力してきた。まず、草分け的存在として挙げられるのは、ウォーラー・ステインの世界システム論から着想し、資本主義経済におけるスケールの役割を分析したテイラーである (Taylor, 1981, 1982; テイラー, 1991)。彼は、世界システム論における中核＝半周辺＝周辺の構造に加え、三つの地理的スケールが資本主義システムの全体構造において重要な役割を持つことを指摘した。すなわち、「現実のスケール」であるグローバルな世界経済、「イデオロギーのスケール」としての国民国家、および「経験のスケール」を構成する都市や地方である。このシステム全体の原動力は、世界経済を通じてグローバルな「現実」を生み出すが、その影響は国民国家の「イデオロギー」によって濾過され、ローカルな地域社会において日常的に「経験」される、と主張した (テイラー, 1991)。

また、空間的不均等発展に着目するSmith (1992, 2000, 2008) は、スケールが「生産」されるものであることを指摘し、諸アクターが「スケール」の戦略的操作を通じて行う「スケールの政治」という分析枠組みを提示してきた。彼にとってスケールは、社会過程の固定化や物質化であるだけでなく、その結果として新たに特定の社会過程を生み出すものでもある。「アイデンティティを境界づける」 (Smith, 1992: 66) 既存のスケールに対する抵抗として、「特定のスケールで確立された政治的要求や権力が別のスケールへと拡大すること」 (Smith, 2000: 726) を意味する「スケール・ジャンピング」といった現象が起こる、と論じた。この枠組みを発展させた研究群が1990年代以降は爆発的に増加し、都市における経済的グローバリゼーションの内実および「グローカリゼーション」に焦点を当てる研究群 (Cox, 1998; Swyngedouw, 2004)、領域再編成としての「リスケーリング」に着目する研究群 (Brenner, 1999) などが登場した。日本においても、「大阪都構想」

や「平成の大合併」など、日本の文脈で「リスケーリング」を論じる試みが盛んである (山崎, 2013; 丸山, 2012)。これらの研究群は、社会的に構築されるものとして、スケールの再概念化への道を切り拓いてきた。

ところで、これらの政治経済学的アプローチからの研究は、多くの場合、資本主義システム下のスケール構造に着目しており、「資本＝労働」関係を重視する傾向があった。これに対し、文化やアイデンティティをめぐる政治に関心を持つポスト構造主義の研究者から、批判的再考がなされるようになったのは、1990年代後半以降のことである (Delaney and Leitner, 1997; Jones, 1998; Marston et al., 2005; Moore, 2008; Kaiser and Nikiforova, 2008)。これらの研究は、資本中心の分析から脱し、文化政治やジェンダーとの関係からスケールを再考する視点の必要性を説いた。また、スケールの構築過程を重視する視座からの再考によって、スケールは実体として存在するのではなく、言説によって構築されているものであるという認識論的立場がとられるようになり、スケールの言説や表象としての側面に関する研究が進んできた。

例えば、Jones (1998: 26–27) は、「グローバル」、「ナショナル」、「ローカル」といったスケールは「表象的な比喩」あるいは「政治空間を枠づける方法」であり、「スケールの構築は表象実践を通じて進む」と論じる。このように見たとき、スケールは中立な概念ではなくなり、権力関係に結びついた表象戦略となる。また、Herod and Wright (2002: 2) は、「他の出来事は容赦なくローカルの中に閉じ込められているように見えるのに対し、特定の出来事がグローバル性という地位を獲得するのはどういう訳か」と問いかける。なぜ、2001年のアメリカ同時多発テロ事件は「グローバル」なテロリズムとされるのに対し、同じ日にイスラエルのナハリヤ鉄道駅で起こった自爆事件は「リージョナル」な事件とされ、数日前に北アイルランドのベルファストで起こった爆破事件

は、「ローカル」なものとなるのか。その区別は、我々のスケール認識がいかに恣意的に形成されているかを示唆している。

さらに、Moore（2008）は、近年のスケール論において、研究者によって用いられる「分析的カテゴリー」としてのスケールと、社会的アクターによって日常的に展開される「実践のカテゴリー」としてのスケールが混同されていると指摘したうえで、スケールを、分析視角というよりも、「制度化された一連の実践と言説」として捉えることを提唱する。そうすることで、スケールに関するナラティブや分類が、いかに特定の考え方や行動様式を生み出すかを問うことができる、と主張する。

しかし、ポスト構造主義のアプローチが、言説上の実践を重視するがゆえに、スケールの持つ物質的および実質的效果を軽視してきた点は否めない。研究者自身が生み出す言説によって既存のスケール観が再強化されることを恐れるあまり、「地理学的用語としてのスケールを抹消する」（Marston et al., 2005: 422）というラディカルな主張がなされるまでに至っている。忘れてはいけないのは、表象としてのスケールが、実質的效果を生み出し、物質世界に大きく作用する点である。実際、スケールには、政治経済アプローチがテーマとしてきた、実体性を持つ（あるいは、そう認識される）空間的広がり、と、ポスト構造主義アプローチが焦点を当ててきた表象的比喩という、両側面があるように思われる。例えば、MacKinnon（2010）は、双方のアプローチが、スケールの構築に関してそれぞれ異なる側面（物質的過程および言説上の過程）に焦点を当てており、相互補完的な洞察を行っているに過ぎないと分析する。また、山崎（2013）はスケールを実体的なものと言説上のものに分け、後者を「スケール言説」と呼んで区別する。

この言説と実体の関係をよく示しているのが、「スケールのパフォーマティヴィティ（行為遂行

性）」に注目する Kaiser and Nikiforova（2008）である。そもそもバトラーの「パフォーマティヴィティ」概念は、自明に存在していると思われるもの（ジェンダー／セックスによって本質化された主体）が、反復的な言説実践によって存在していることを示すものだった。パフォーマティヴィティとは、「反復的で引用的な諸実践」であり、それを通じて「言説が、それが名付けるところの効果を生み出す」（Butler, 1993: 2）。これに依拠しつつ、彼らは、スケールが「場所とアイデンティティのあいだの時空間的な結合と断絶をつくりだす言説装置」（Kaiser and Nikiforova, 2008: 537）として展開される様子を、エストニアのナルヴァに関する言説分析を通じて検討している。「スケールの文化政治」を唱える彼らにとって、スケールとは、日常の政治に関与する一連のアクターによって「遂行」されるものであり、スケール言説が反復的に実践されることで、「スケール効果」が生じる。また、スケール効果を生み出す反復的かつ引用的なあらゆる実践は、つねに「マルチスケール化された言説領域においてのみ遂行されうる」（Kaiser and Nikiforova, 2008: 544）。各スケールは、常に互いを参照し合うような言説実践によって「遂行」される。

筆者は、この考え方に倣い、スケール認識を反映し、「遂行」されることで実質的效果を生み出す言説の在り方に着目する。言説とは、「主に言葉で表現された内容を意味するが、言葉に限らず、さまざまな表現行為・所作・振る舞いも含む。そうした行為について、行為をとおして特定の意味がつくりだされ、その行為を取り巻くさらに広い社会的・政治的な概念や意味の体系に結び付けられ、行為が正当化されるような場合がある。そういう行為を言説という」（山崎, 2013: 144）。このような言説実践の反復を通じて存在しうるもの、としてスケールを捉える「パフォーマティヴィティ」の観点からは、スケールの構築過程をより微細に検討し、「スケール化した考え方や見解を社会

的に構築する諸実践だけでなく、これらのスケール認識を不安定化する『ずれや亀裂』に注意を払う」(Kaiser and Nikiforova, 2008: 543) ことを可能にする。この観点から見れば、「スケールの政治」とは、政治機構に限らない様々なアクターが、自らの覇権を維持あるいは拡大するために行う表象戦略であり、日常的な言説実践を通じて「スケール」を固定化あるいは本質化する行為、および既存のスケール認識を不安定化する行為として捉えられる⁴⁾。

このアプローチの利点は、実質的效果として現れるスケールと言説上のスケールの相互作用を示すことで、物質／表象の二項対立を問い直しうるということだ。しかし、一方で、「スケール」という用語の意味内容をめぐる混乱を招くおそれがある。したがって、これ以降は便宜的に、実体化された空間的広がりとしてのスケールに対し、言説実践において反復的に用いられることで実質的效果を生み出す表象を〈スケール〉と山括弧付きで表記することにする。また、〈ストラスブール〉、〈アルザス〉、〈フランス〉、〈ヨーロッパ〉、〈モロッコ〉などの特定の地名を〈スケール〉の諸形態として分析する。本稿では、地名とスケールの関係性については立ち入らないが、言説実践においてそれぞれの地名は特定領域を指し示す〈スケール〉として機能し、「スケールの政治」を通じて本質化あるいは不安定化されると考えられる⁵⁾。

本稿の関心事は、いかに〈スケール〉が人々の空間認識を反映するかたちで実践され、いかに人々の生きる物質世界に影響を与えているか、ということにある。とりわけ焦点を当てたいのは、

スケール言説がいかに排除／包摂の論理として機能しうるか、という問いである。〈ローカル〉、〈ナショナル〉、〈グローバル〉といった表象は、特定の集団・個人あるいは現象に対するインサイダー／アウトサイダーのラベル付けの装置になりうることは、これまでの研究で明らかにされてきた⁶⁾。本稿では、〈スケール〉が「ここ／よそ」のラベリング装置として作用することを見出し、スケール言説とその実質的效果を通じて「ここ／よそ」の境界が再構築される過程に焦点を当てる。

III ストラスブールの大モスクに関する概要

1 調査地の概要

本節では、モスク建設の背景となるストラスブールの地理的・社会的特徴を述べておく。人口27万人余りを有するフランスの中核都市ストラスブールは、ドイツとの国境沿いに位置しており、古くから地域の行政的・経済的中心地としての機能を果たしてきた。ドイツ語で「道の街」(Straßburg)を意味する語源を持つことからわかるように、東西においてゲルマン世界とローマ世界の結び目をなし、南北をライン川が横断する、交通の要所として発展してきた。1681年にフランス王国に併合されて以来、普仏戦争後の1871年にはフランスからドイツへ、第一次大戦後の1919年にはドイツからフランスへ、第二次大戦中にはナチス・ドイツの占領下に入り、戦争終結後には再びフランスへと、幾度も帰属変更と同化政策の憂き目にあったアルザス・モーゼルの重要都市である。

4) もっとも、「スケールの政治」を言説に関わるものとして扱う視点は新しいものではない。山崎 (2011) は、「スケールの政治」を大阪都構想に関する言説分析に応用している。また、Jones (1998) は「スケール・ジャンピング」を言説上の表象戦略として捉えた。

5) Kaiser and Nikiforova (2008) も、「スケールのパフォーマティヴィティ」の分析において、「ナルヴァ」「エストニア」「ロシア」「ヨーロッパ」「西洋」「東洋」など特定の地名に依拠している。

6) 例えば、Howitt (2002) はレヴィナスの他者論に依拠しつつ、スケール化されたプロセスの中で他者性や差異が生じることを述べている。また、麻生 (2016) は「ローカル」や「ナショナル」といったスケール表象が、近代日本におけるキリスト教集団排除の論理として機能したことを指摘している。

この地域は、その帰属自体が独仏間の長い対立の引き金となり、血縁や文化的同質性に基づくドイツの「ネーション」観と、帰属の意志に基づくフランス的「ネーション」観の、それぞれの妥当性の証左として引き合いに出されてきた（中本, 2008）。その度重なる帰属の変更は、両国の文化や社会制度の混淆をもたらし、言語と宗教を軸とするアルザス地域主義を生み出した。第二次大戦以降は、ストラスブールは独仏和解のシンボルと化し、市行政は「ヨーロッパ首都」としての位置づけを重視する方針を打ち出す。ストラスブールにはヨーロッパ評議会やヨーロッパ人権裁判所の本部が置かれ、各国の領事館も多く立地している。かつては軍事戦略上の要所かつ国民統合の対象であった国境都市としての性格が、ヨーロッパ首都としてのアドバンテージをもたらしていることが指摘されている（手塚, 2006）。フランスとドイツという、二つの〈ナショナル〉の狭間で揺れ動いてきた結果、一方では〈アルザス〉に基づく地域的アイデンティティが強化され、他方では欧州統合の流れの中で〈ヨーロッパ〉を「遂行」する様々な実践が見られる場となっている。この点でストラスブールは、反復的言説実践とその効果によって、しばしば「スケールの政治」が先鋭化してきた地だと言える。

本稿にとって重要な特徴は、その宗教体制にある。フランスのパ・ラン県、およびオ・ラン県、モーゼル県の三つの県から構成されるアルザス・モーゼル（第1図）は、ライシテが国是とされるフランスにあって、ライシテの法的基盤をなす法律群が適用されていないという例外状況にある。なぜならこの三県は、ライシテの基盤となった法律群が成立した19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツに属していたからである。その歴史ゆえ、フランスの他地域とは異なり、1801年のナポレオン

第1図 アルザス・モーゼル地方とストラスブールの位置
Figure 1. Location of Strasbourg in Alsace-Moselle

とローマ・カトリック教会のコンコルダート（政教協約）⁷⁾が今も効力を有しており、四つの公認宗派が存在する。すなわち、カトリック教会、プロテスタントのルター派、改革派、ユダヤ教会である。この四宗派の聖職者はフランス国家から俸給を受け取っており、四宗派の団体に対しては大幅な税制免除があるうえ、宗教施設維持費も国家に負担してもらうことができる。ただし、この特殊状況は決して憲法原則としてのライシテに違背するものではなく、フランスの国土にある限り、アルザス・モーゼルはライシテの効力の範囲にあるものと判断されている。

この地方制度において、イスラームは公認宗派の一つではないものの、団体登録することで、「非公認宗派」として、他地域では生じえない恩恵を受けることがある（佐藤, 2016）。恩恵の一つとして重要なのは、三県の政教体制において「非公認宗派」を含む宗教団体への公的資金援助が禁止されておらず、交渉次第では資金援助を受けることも可能である、ということである。実際、「ス

7) コンコルダートとは、ローマ・カトリック教会と政府の間の協約全般を意味する言葉であるが、特に1801年7月15日にナポレオン1世と教皇ピウス7世の間で締結された協約を指すことが多く、本稿でもこの意味で用いる。

トラスブールの大モスク」の建設において公共機関から直接的な資金援助がされたのは、この特殊な政教体制あつてのことである。ちなみに、他地域に適用されている「教会と国家の分離に関する法律」(1905年制定, 通称「政教分離法」)では、宗教団体に対する国家からの直接的な資金援助は禁じられているため、フランスにおいてモスク建設資金の大半は信徒たちの寄付か諸外国政府からの援助で賄われている⁸⁾。

ストラスブール市では、モスク建設以外にも、アルザス・モーゼルの特殊な政教体制を活かしたムスリムの権利向上の試みが盛んである。特に1990年代には、ストラスブール大学におけるイスラーム神学部の創設に向けた動きや、イスラーム団体の公認宗派化に関する法学的議論が進展してきた。大モスクが落成した2012年には、フランスで唯一の事例となるムスリム専用の公共墓地も完成した。「ムスリム墓地区画整備やモスク建設許可の如何によって、フランスのイスラーム景観図を一新するかしないかを決定するのは、市議会である」(Muller, 2009: 146)と指摘されるように、墓地やモスク建設の行方は市政の決定に大きく左右される。ストラスブール市の場合も、このような流れがつけられたのは、カトリクス・トロットマン (Catherine Trautmann, 社会党, 1989~97年および2000~01年に市長)とロラン・リス (Roland Ries, 社会党, 1997~2000年および2008~19年現在まで市長)主導の市行政によるところが大きい。特に、リスはコンコルダートを「アルザス・アイデンティティの本質的要素を構成する」ものとして支持する立場をとっている⁹⁾。

ストラスブール在住ムスリムの公的な人口統計は存在しない。「ライシテ」を国是とするフランスでは、差別に繋がりがかねない個人の宗教的信条

について尋ねるような公的統計をとることが禁じられているからである。しかし、公認宗派組織が発表する信徒数に基づく推定によれば、ストラスブール市では人口全体の65~67%を占めるカトリック, 22.5%のプロテスタント, 10%程度のムスリムが存在すると考えられる (Frégosi, 2001: 99)。カトリックが人口の大多数を占めるフランス全体において、ストラスブールは古くからカトリック, プロテスタント, そしてユダヤ教が併存してきた地であり、その「宗教的多元性」はムスリムに対しても門戸を開き始めている。ただし、ムスリムと一口に言っても、その出自や文化は様々である。ストラスブールにおける移民の出身国別統計では、2014年時点で計57,101人の移民のうち、8,562人がモロッコ, 6,688人がトルコ, 5,380人がアルジェリア, 1,357人がチュニアの出身であることが示されている¹⁰⁾。同統計によると、トルコ系移民がフランス全体人口に占める割合が4%なのに対し、ストラスブール全体人口に占める割合は12%で突出している。また、マグレブ三国のなかでもモロッコ系人口が最多である点で、アルジェリア出身者を最多とするフランス全域の傾向とは微妙な違いを見せている。異なる出身国のムスリムたちはそれぞれのコミュニティを形成する傾向にあり、アルザス全体でトルコ系ムスリムとマグレブ系ムスリムの棲み分けが見られる (石丸, 1993)。

2 モスクの概要と建設経緯

「ストラスブールの大モスク」は、信徒からの寄付に加え、ストラスブール市、バ・ラン県、アルザス地域圏¹¹⁾、モロッコ、サウジアラビア、クウェートからの資金援助を受けて建設された (第2図)。1階部分に1,500人収容の男性用礼拝室、

8) ただし、「宗教的」目的を持つとは見なされない文化施設に対する公的資金援助や、長期賃貸借による格安での場所提供という間接的援助は、多くのケースでなされている。

9) 2012年2月10日の Le Monde (2012) の記事による。

10) INSEE, RP2014 exploitation principale, géographie au 01/01/2016.

第2図 ストラスブールの大モスク建設資金の出処

Figure 2. Financial source of construction of Grand Mosque of Strasbourg

(GMS のパンフレットをもとに筆者作成)

2階部分に500人収容の女性用礼拝室があり、沐浴室や会議室も備えている。このモスクは、ストラスブールの中心的区域である Centre-ville、および Neudorf-Musau と、半周辺的區域とされる Meinau や Elsau との境界をなしている地点にある（第3図）¹²⁾。モスクは、トラム停留所の近く、バス停の目の前に位置しており、郊外まで延びる大型道路にも続いている。また、イル川とローヌ・ライン運河の合流地点に位置している。モスクは、中学校、高校、市民病院、ストラスブール大学の医学部キャンパスなどが立ち並ぶ一帯にあり、市の中心部と周辺部を結ぶ、交通の便の良い地点にあると言える。

このモスクが完成に至るまでに、半世紀近くの歴史があった（第1表）。1960年代以降、ストラスブールのムスリムたちは礼拝の場を求めて試行錯誤を繰り返してきた。多くの場合、集団礼拝は暫定的・不可視的な場所利用から始まった。住宅の一室、個人宅の地下室の借用、廃工場、教会のスペース借用などが典型例である。これらの礼拝所は「地下室のモスク」と呼ばれ、場所不足、洪

第3図 ストラスブール市内におけるモスクの立地

Figure 3. Mosques in Strasbourg

(Abdoun et al. (2004: 190–191) および現地調査により筆者作成)

水被害などの困難に直面してきた。ストラスブールの大モスクの前身も、このような不可視的な礼拝所の一つであり、1982年に旧工場を改修して作られた。この礼拝所は、モロッコ系の全国組織である AEIF（フランスのイスラーム学生連盟：Association des Étudiants Islamiques en France）のストラスブール支部が運営していた。ちなみに、大モスク建設後、この団体はモスク管理団体として GMS に改名しており、以下ではこの呼称を用いる。前身の礼拝所では、利用者増加とともに場

11) アルザス地域圏は2015年まで存在したフランスの地方行政区画で、バ・ラン県とオ・ラン県から成った。地方制度改革により、モーゼル県が属するロレーヌ地域圏およびジャンパーニュ・アルデンヌ地域圏と統合され、現在では、グラン・テスト圏の一部となっている。

12) 中心的区域および半周辺的區域の分類は Muller (2009: 80) に拠る。

第1表 大モスク建設に至る経緯

Table 1. Chronological outline of the construction of Grand Mosque

年	出来事
1982	大モスク前身の礼拝所が誕生
1992	当時のストラスブール市長が礼拝所を訪問 ⇒建設計画支持
1996	GMS による「ヨーロッパの協同ムスリム 評議会」の創設宣言
1998	公認宗派代表者による建設支持の共同声明
1999	ストラスブール＝フェズ間で友好協定締結 市議会による大モスク建設支援決定
2001	市政の変化⇒建設計画見直し
2006	建設開始
2007	建設会社との不和、建設中断
2009	建設再開
2012夏 秋	一般信徒へのモスク公開 落成式

(GMS のパンフレットなどを参考に筆者作成)

所不足が深刻化し、金曜礼拝時には隣接する公道が礼拝に来た信徒で溢れかえるまでになっていた。

モスク建設に対する訴えは、1990年代に入ってから実現へと向かう。1992年に、トロットマン市長は、場所不足で問題となっていたこの礼拝所を訪問し、翌年には市内における大モスク建設計画に対する支持を表明する。これを受け、礼拝所の責任者であったアブデッラー・ブスフ (Abdellah Boussouf) は、新たな大モスク建設計画に着手するため、市内の9つのイスラーム団体の責任者から成る CAMS (ストラスブールのムスリム団体連携組織: Coordination des Associations de Musulmans de Strasbourg) を創設し、そこで他のムスリム団体からも自らが主導する大モスク建設計画に対する承認を得た。一方、大モスク建設をめぐることは CAMS に所属しない別のムスリム団体との主導権争いが生じたが、この点に関しては次章で述べる。

この大モスク建設計画は、ムスリム団体のみならず他の宗教団体からも支持されたことを、GMS メンバーの L 氏は証言する。

この計画はもちろんストラスブール市に支えられたけれど、それだけでなく、カトリック、プロテスタント、そしてユダヤ教の宗教共同体にも支えられた。我々はすでに彼らとの宗教間対話の歴史を持っていた。だからこそ (筆者注: モスクの建設計画が) より簡単だった。¹³⁾

特筆に値するのは、1998年に、ストラスブールのユダヤ教会、カトリック教会、プロテスタントのルター派と改革派の各代表者が、共同でモスク建設を支持する宣言¹⁴⁾を行ったことである。当時のリス市長の呼びかけによって実現したこの宣言には、各公認宗派の長の署名がある。曰く、「我々は、ストラスブールの多様なムスリム共同体が、彼らの地区に、彼らの要求に応じた礼拝場を有し、すでにあるものを改善するため、あるいは新しく建設するために必要な援助を手に行けることを切に願う」¹⁵⁾。市長の呼びかけに応える形であったとはいえ、公認宗教の代表者の間に、宗教間対話の一片を担う存在としてムスリム・コミュニティを迎え入れようとする姿勢が見て取れよう。

1999年4月には、ストラスブール市議会はモスク建設支援を可決する。この決議をもとに2000年5月、土地に関して市は団体側と50年間の長期賃貸借契約を結び、さらに建設資金全体の10%を限度とする助成金の拠出を決定した。同年には、モスクの建築コンペが行われる。ザハ・ハディドやマリオ・ボッタなど世界的に著名な5名の建築家による提案がなされたのち、12人から構成される審査員団によって、イタリア人建築家パオロ・ポルトゲジ (Paolo Portoghesi) のプロジェクト案が

13) 2014年9月、GMS メンバー L 氏へのインタビューより抜粋。

14) 正式名称は、「ストラスブールの中心的なモスクの建設計画に関する宗派の代表者一同による宣言」であり、Abdoun et al. (2004: 192) に全文が掲載されている。

15) 1998年の公認宗派の代表者たちによる宣言より抜粋。

選ばれた。建築コンペが行われ、市行政が深く関与した本モスクの建設は、官民協働のプロジェクトであったといっても過言ではない。大モスク建設計画を GMS と協力して取り進めた都市整備会社 SERS (Société d'Aménagement et d'Équipement de la Région de Strasbourg)¹⁶⁾ の担当職員の語りもこのことを表している。

他の住民たちの承諾を得るために最善なのは、建築コンペを企画し、いくつかの計画の中からどれが良いか議論することだった。つまり、民主的なプロセスだ。実際、我々は、これが本当の公共計画であるかのように行った。(中略) これは私的な計画であり続けたが、我々はまるで公共計画であるかのように展開した。¹⁷⁾

しかし、2001年に市の政権が中道左派の社会党から中道右派の国民連合運動へと変化した結果、建設計画は大幅な修正を求められることとなった。GMS は2001年、新市長の就任直前に建設許可申請を提出したが、市長交代のあと建設計画は18か月間遅々として進まず、停滞状態になったばかりか、新市長ファビエンヌ・ケレー (Fabienne Keller, 国民運動連合、2001～08年まで市長) によって、当初計画されていたミナレットと、図書館などの文化施設の建設は却下されることとなった¹⁸⁾。元 GMS メンバーで建設計画を主導した D 氏は、当時のことを以下のように振り返る。

2001年に我々は最初の建設許可申請を提出したが、そこにはミナレットがあった。それは市政交代のわずか1か月前のことだった。ついてないよ。18か月間、つまり1年半、彼ら(筆者注：新市政)は我々の案件を足止め

した。当初は文化センターもあった。(中略) 交渉の間、彼らは言った。ミナレットはなし、文化的部分は後で。¹⁹⁾

2006年によりやく建設が開始されたが、ドイツ系建設会社との契約トラブルが原因で2007～09年は建設が中断される。2009年に新たな建設会社を迎えて工事を再開したモスクは、2012年の夏にはラマダンのため信徒にその門扉を開き、2012年9月27日、ついに落成式を迎える。落成式には、信徒や団体メンバーのほか、リス市長(2008年に再就任)、モロッコの政府関係者、ストラスブール・ユダヤ大長老、CFCM 議長、当時の内相マニユエル・ヴァルス (Manuel Valls) らが参加した。初めて新モスクの扉が開かれたときの様子を、信徒の一人はこう述べる。

みんなが一緒にいて、みんなが満足で幸せで。こんなに美しい場所にいるのが心地よかった。いつものように少し薄暗い場所ではなく。なぜなら、人々は必ずしもたくさんのお金を持っているわけではない。それで国家は我々を支援しない。でもこれと反対に、市がモスクを支援しているのをみるのは嬉しかった。ラマダンの最後の礼拝には、たくさんの人が外の駐車場の至る所にいた。至るところに！駐車場には車は一つもなくて、人しかなかった。すごく美しいと思わない？みんなが抱き合い、プレゼントを贈り合って。すてきでしょう？このことをメディアは見ない。人々が愛し合い、抱き合い、プレゼントを贈り合う、というようなことはテレビでは放送されない。それは残念なこと。²⁰⁾

16) SERS はバ・ラン県およびストラスブール市の主導で設立された民間の都市整備会社で、理事長に現市長を据える。大規模で公的な都市開発事業などを手掛ける。

17) 2014年9月、SERS 職員 H 氏へのインタビューより抜粋。

18) ただし、ミナレットや文化施設が建てられなかったのは、ムスリム団体側の資金不足も理由の一つであったことを L 氏や C 氏から聴取した。

19) 2014年3月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。

20) 2014年3月、信徒 N 氏へのインタビューより抜粋。

IV モスク建設におけるスケールの表象と効果

1 建設アクターによる「スケールの政治」

モスク建設に関わった諸アクター（第4図）は、様々なスケール言説を利用しながらモスク建設計画の正当性を主張し、計画に対する自らの影響力を最大化しようと動いてきた。特に、モスク管理団体である GMS は、状況に応じて異なる〈スケール〉をモスク建設計画に結び付けるといった戦略をとってきた。本節では、ストラスブール市内の小さなモスクを管理するにすぎなかった一ムスリム団体が、表象戦略としての「スケールの政治」をいかに展開しながら「大モスク」運営という地位を獲得したのか明らかにする。

GMS はそもそも、モロッコ系ムスリム組織 AEIF のストラスブール支部として誕生し、もともとは市内の小さな礼拝所を運営する数多のムスリム団体の一つに過ぎなかった。精力的に活動を行っていたものの、行政の唯一の対話者というほ

どの影響力は持たなかった。そこで、大モスク建設計画を実現するため、GMS の当時の管長プスフは、市内の他の 8 つのムスリム団体と連携して、自らが議長となる CAMS を立ち上げた。CAMS の支持を得て、計画予定のモスクがストラスブールのイスラームを代表するにふさわしいと認められることで、ストラスブール行政からの経済的支援を獲得しようとしたのである²¹⁾。「ストラスブール在住のムスリム全体を代表するモスクをつくる」という考えが、当初からモスク建設計画を支えていたことは、GMS メンバーの語りからも窺える。

このモスクを建設する考えは、礼拝所の運営団体の過多が生じているという事実から生まれた。イスラームを代表する堂々たる礼拝の場を有する必要があった。だから、我々は可視的な礼拝場について語り始めた。それは可視的なものでなければならない、と我々は考えた。ロラン・リス市長がイスラームは街中に立派な家を構えなければならない、と言ったように。つまり、社会がイスラームを可視的なものにすることを求めた。アイデアはこのようにして生じた。²²⁾

「イスラームを代表する」、「可視的な」モスクの建設を模索する GMS は、CAMS を立ち上げることで、市内の一ムスリム団体のみに帰属するモスクという位置づけから、より規模の大きな〈ストラスブール〉を代表するモスクへと、「スケール・ジャンピング」を行うことで建設計画の妥当性を示そうとしたといえよう。しかし、この計画がすべてのムスリム団体の賛同を得ることはなかった。CAMS が計画を押し進めていたのと同時期に、IME（ヨーロッパのムスリム学院：Institut Musulman d'Europe）という別のムスリム団体もモスク建設を計画していた。大学知識人

第4図 大モスク建設に関わったアクターの関係

Figure 4. Relationships among actors involved in the construction of Grand Mosque

(現地調査により筆者作成)

21) Donnet (2014: 37) は、CAMS の関与がモスク建設計画に対する市行政の支援を引き出したことを指摘する。

22) 2014年3月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。

によって進められていたこの計画は、主に「アルキ」²³⁾と呼ばれるアルジェリア系フランス人によって支持されていた。Frégosi (2001) によれば、二つの計画の存在は、市議会の中、ひいてはマジョリティだった左派の間でも分裂を生み出し、当時の市長ロラン・リスは、競合する二つのプロジェクトに裁定を下すのに手間取っていた。ムスリム団体間の対立に直面しながらも、1999年に市議会はモスク建設の支援を可決する。このとき市長により CAMS の計画を優先的に採択する意向が示されるが、これに対し、IME を支持していたアルキたちが、CAMS の計画は「保守主義のイスラームの见解を反映して」いるとし、「フランス式のイスラーム」や「共和国カラーのモスク」の建設を求める激しい抗議行動を展開している²⁴⁾。〈ストラスブール〉に依拠して自らの計画を正当化する GMS に対し、IME の支持者は、〈フランス〉に訴えて対抗していることがわかる。

〈ナショナル〉な表象を用いて行われた反対活動は、IME の支持者によるものだけではない。建設許可の決議の日には、極右政党とされる「国民戦線－国民運動」(Front National-Mouvement National) のメンバーが、「20年後、フランスはイスラーム主義者の共和国になる」と書かれたポスターを広げ、抗議活動を展開している (Muller, 2009: 147-148)。反対派は、モロッコ系団体が進める大モスク建設を、フランス国家に対する脅威の象徴として捉えていたと言える。

このような反発にあった GMS は、他方で、〈ヨーロッパ〉と自らを結びつける戦略をとってもある。当時の GMS 管長ブスフは、雑誌のインタビューに応じてこのように述べている。

私はモロッコ人であることを誇りに思い、ま

た宗教実践の自由が保障され、公的職業へのアクセスが信仰ではなく市民性に基づく国、つまり宗教的マイノリティがのびのびとできる国に属していることを誇りに思う。フランス社会に調和して生きるため、私はこの文化を享受する。しかし、私が擁護するプロジェクトは、いかなる国家にも属していない。これはストラスブール住民全体に属したプロジェクトであり、我々がモロッコとの間に持つ関係性は他のすべてのムスリム諸国との関係性と同じである。ヨーロッパのモスクおよび組織との関係性に関しては、(中略) 私はヨーロッパの大きなイスラミックセンターを管理するムスリムの人々と一緒に働いている。(中略) ヨーロッパの首都ストラスブールの住人として、私はムスリム組織の中でこのイメージを具現化し発展させる。²⁵⁾

この発言において複数の〈スケール〉が登場しているが、ここで〈ヨーロッパ〉が持ち出されているのは、ストラスブールが「ヨーロッパ首都」として発展してきたことに起因すると見るべきだろう。モスクが地元のムスリムの存在を代表するにふさわしく、公共団体からの支援の妥当性を主張するため、GMS は〈ストラスブール〉を強調することの延長として、〈フランス〉を超え、イメージ戦略において〈ヨーロッパ〉への「スケール・ジャンピング」を図っている。ブスフの言葉通り、GMS は、1996年11月のヨーロッパ評議会において「ヨーロッパのイスラームとムスリム」というシンポジウムを開催し、8か国で活動する13のイスラーム団体から成る「ヨーロッパの協同ムスリム評議会」の創設を宣言している。GMS の表象戦略は、他ムスリム団体との国境を越えた連携とい

23) アルキとは、アルジェリア独立戦争時にフランス側に協力したアルジェリア人兵士およびその子孫を指す。多くがアルジェリアの独立後の報復をおそれてフランスに引き揚げた。

24) 現地日刊紙 *Dernières Nouvelles d'Alsace* の1999年4月13日の記事。

25) イスラーム文化の紹介を目的としたフランスの雑誌 *La Medina : le magazine des cultures musulmanes*, n. 6, janvier-février 2001. « L'Islam en débat, Une mosquée à Strasbourg », p. 38.

う実質的効果を生み出しており、ここに「スケールのパフォーマンス」が確認される。

さらに、このモスクはアルザス・モーゼル地方の制度を利用することで、地方公共団体からの助成金を獲得することができた。この点では、GMS は〈アルザス〉と結びつく論理を利用したとも言える。筆者が行ったインタビューでも、アルザスの地域特性を重視する語りが得られた。

アルザスでは、ムスリムは市に、州議会に、助けられている。他の県では、こうはいかない。他の県では、自分自身で（筆者注：モスク建設資金を）払わなければならない。なぜなら厳しい分離、厳しいライセンスがあるからだ。ここでは、ライセンスはそこまで（筆者注：厳格な）ライセンスではない。地方法がある。²⁶⁾

フランスで、我々が不平を言うべきことは何もないと思う。（中略）だがアルザスでは、我々はさらに恵まれているかもしれない。というのは、コンコルダートがあるからだ。²⁷⁾

このようにモスク建設過程では、〈ストラスブール〉〈アルザス〉〈フランス〉〈ヨーロッパ〉といった様々な〈スケール〉が計画に関連付けられ、モスク計画の正当性と非正当性を訴えるために動員されてきた。アクターの戦略的な言説実践において、それぞれの〈スケール〉には異なるイメージが付与されているものの、「ここ」に属する者、つまり「インサイダー」であることの指標として使われている点では共通している。GMS 計画反対派が〈ナショナル〉に訴えるのは、GMS の存在を「よそ者」として糾弾するためであり、また、GMS による〈ヨーロッパ〉の強調は、自らの〈ストラスブール〉性を補完し、ムスリム諸国からの資金援助に対する批判をかわすためである。

このことは、モロッコという別の要素が、重要な役割を果たしつつも声高には語られないことと対照的である。上述の通り様々な「スケールの政治」を用いながら自らの正当性を示してきた GMS は、もとはモロッコ人学生によってつくられた団体である。モロッコとの強い結びつきは資金源にも反映されており、全体の建設費用のうち、モロッコ政府からの資金援助は建設費用の大多数である39%を占める（第2図）。また、IME の計画と競合関係にあった1999年には、ストラスブールとモロッコのフェズ市の間で友好協定が結ばれている。モスクの落成式には、モロッコ政府関係者も出席した。モロッコ政府からの支援は、モスク建設計画の達成には不可欠な要素であったといえるが、GMS の団体メンバーが、フランス国内の公的な場でモスクの〈モロッコ〉性についてことさら強調することはない。〈モロッコ〉という表象を登場させれば、「よそ者」とであるとみなされ、自らの計画の正当性に異議を挟む余地を与えることになる。モスクをめぐる言説上で頻出する〈ストラスブール〉、〈アルザス〉、〈フランス〉、〈ヨーロッパ〉には、すべて「ここ」の含意があるが、〈モロッコ〉は「ここ」に対置させられている。言及を控えることは、「遂行」しないことと同義ではない。〈モロッコ〉もまた、「よそ」として意味づけられる形で「遂行」されていると言えるかもしれない。

2 モスクの物質面に対する影響

「スケールの政治」によって 建設アクターが戦略的表象実践を展開しながら建設に至ったモスクは、様々な〈スケール〉に関連するイメージが、その物質面にも色濃く反映されている（第5図）。イタリア人建築家パオロ・ポルトゲジによって構想されたモスクのデザインは、その最たる例であ

26) 2014年3月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。

27) 2014年3月、GMS メンバー C 氏へのインタビューより抜粋。

る。彼は「ローマのモスク」を手掛けたことでも有名な建築家であるが、「ストラスブールの大モスク」建設に際しては実際にストラスブールを訪れ、この地の特色を生かしたデザイン設計を意識したことを、雑誌のインタビューで下記のように証言している。

ストラスブールに関しては、アルザスの多くの建築で存在している、ヴォージュの砂岩と銅を使いたい。また、ミナレットの突端は大聖堂に依拠したものを計画していた。（中略）ストラスブールは文化の交差点で、近代性に関かれた街である。市役所とムスリム・コミュニティと真の対話を開始することができた。私にとって、これらのアクターとの関係性が最も重要だと思う。²⁸⁾

建築家が、市やムスリム団体との対話を通じ、地元由来の素材や、ストラスブール大聖堂に依拠したデザインを用いることで、〈ストラスブール〉らしさや〈アルザス〉らしさをモスク設計に反映しようと努めたことがわかる。

また、市政の変化によって建設計画が見直され、

第5図 ミナレットのないストラスブールの大モスク
Figure 5. Grand Mosque of Strasbourg without minarets

（2014年3月筆者撮影）

当初は予定されていたミナレットと文化施設の建設が却下されたことは先に述べたとおりであるが、ここにもスケール言説の影響が垣間見える。以下に挙げる関係者の語りからは、〈ローカル〉なものを志向する新市政の姿勢が読み取れる。外国政府の資金援助や干渉を避けようとするケレー新市長の〈ローカル〉観が、モスクの物質性にも影響を与えていることがわかる。

イスラーム観、ムスリム諸国の情勢は2001年9月のあと変化した。さらに、ストラスブールで、別の市長への交代があった。その市長は、このように言った。「このように重大なプロジェクトは望まない。なぜならこのように重大であれば、湾岸諸国から経済援助を受けるだろうから。私はローカルな何かを望む」と。²⁹⁾

彼ら（筆者注：新市政）はたくさんの条件を課した。第一の条件はお金、資金が外国から来ないこと。第二に、モスクはストラスブール住民に属するものであるということ。これも減茶苦茶だ。なぜならモスクでは扉の前で誰かに国籍を聞いたりしない。（中略）教会に入るために、身分証明書の提示を求められるだろうか？第三の条件は、説教がフランス語でなければならないということ。これもおかしい。なぜなら説教は人々とコミュニケーションをとるためのものであって、言語は重要ではなく、人々が理解する言葉を使う。モスクではずいぶん前からアラビア語とフランス語を使っている。新市長が知らないだけだ。³⁰⁾

ただし、同一の現象でも、発言者の志向や立

28) *La Medina : le magazine des cultures musulmanes*, n. 6, janvier-février 2001. « L'Islam en débat, Une mosquée à Strasbourg », p. 46.

29) 2014年9月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。「2001年9月」とはアメリカ同時多発テロ事件のことを指していると推察される。

30) 2014年9月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。

場、状況によって関連付けられるスケール表象は変化しうる。SERS 担当職員の H 氏は、大モスクが「ヨーロッパのモスク」と見なされなくてはならなかったと語る。

このプロジェクトがここの人々に受け入れられるためには、これがモロッコのモスクやトルコの一般的なモスクの模倣であってはならなかった。ヨーロッパのモスクである必要があった。(中略) ヨーロッパのモスクとは、ここの材料を使用し、それを想起させるようなモスクのことである。もしあなたが見たなら(筆者注: わかると思うが)、例えばそれは赤石(筆者注: ヴォージュ産の赤砂岩)である。また、しばしばトルコのモスクを特徴づける鉛筆のように尖ったミナレットもない。ケール(筆者注: ドイツの隣町)に行けばそのようなミナレットが見えるが、それを見ると我々はトルコにいると感じる。それは我々が望まなかったことだ。また、例えば、(筆者注: 大モスクの)ドームは銅でできている。つまり、大聖堂と同じ材料を使っている。だから、それはここに統合する何かであり、一方でもちろん、内部は本物のモスクでなければならない。メッカの方向に向けられ、メッカの方角を向き、ミンバル(説教台)やミフラーブ(聖龕)などすべてが現れており、しかし統合されていなければならない。³¹⁾

「ヨーロッパのモスク」であることは、彼にとっては地元の素材の使用と、ミナレットの欠如によって保証される。ここでの〈ヨーロッパ〉は、〈モロッコ〉や〈トルコ〉と対義になっており、ヨーロッパとそれ以外の諸外国という二元論的区別に基づいているように見える。再びモスクが

「よそ者」でないことを示すために、〈ヨーロッパ〉の表象が用いられている。

さらに、モスクの立地にもスケールに関する地理的想像力が影響していることが推察される。モスクが建つ土地は、行政が自らの所有地から選び、「行政不動産長期賃貸借」³²⁾と呼ばれる50年の契約によって GMS 側に提供したものである。用地選択の際には、交通の便の良さに加え、利用者の出自、エスニシティ、居住地域の傾向が偏らないような立地条件が求められていた。2003年に提出された建設許可申請書類には、「すでに多くの信徒が集中している周辺的な地区に位置するのではなく、中心的な場所を自由に使えることは重要だと思われる」と記されている³³⁾。また、SERS の担当職員は、モスク建設地の選定について以下のように述べる。

我々は、このモスクを多くのムスリムのいる地区に建てたいとは思わなかった。そうであれば、ゲッターが生まれる。我々は、至る所からムスリムが来られるような、しかし閉じたものと見なされないような、ストラスブールの十分に中心的な位置にモスクを建てたいと考えた。³⁴⁾

これは、〈ストラスブール〉性の強調として読み取れると同時に、セグリゲーションやゲッター化を、国家分裂をもたらしうる「コミュニタリズム」として忌み嫌うフランスの共和国的価値観の現れとも解釈できる。一つのエスニシティに偏らない、地域のムスリムを代表する「大聖堂のモスク」を建設しようという考え方はストラスブールに特殊なものではなく、フランスの多くの都市で1980～90年代にかけて持ち上がったモスク建設計画に見られるものである(Maussen, 2007: 999)。

31) 2014年9月、SERS 職員 H 氏へのインタビューより抜粋。

32) 不動産の所有者である地方公共団体が、第三者に公有地を安値で賃貸することで、この第三者が公益性のある事業を展開するために公有地上に工作物を作ることを可能にする制度。

33) 2003年に提出された「ストラスブールの大モスク」建設許可申請書からの抜粋。

34) 2014年9月、SERS 職員 H 氏へのインタビューより抜粋。

ストラスブールを代表するモスクを作るという〈ローカル〉の強調は、根底では国家構成員の「統合」を求める〈ナショナル〉な言説実践に通じている。

ちなみに、モスク外面における建築材料、ミナレットの有無、立地条件などの可視的側面においては〈ローカル〉性が追求されたモスクだが、その内部はモロッコ風の装飾がなされている（第6図）。礼拝室の壁一面は、モロッコから呼び寄せた職人につくらせた伝統的「ゼリージュ」の装飾で覆われ、モロッコから取り寄せた、繊細な細工が施された木製のミンバルが備えられている。大多数がモロッコ系のGMSのメンバーにとって、モスクをモスクたらしめる伝統性や真正性は、〈モロッコ〉と強く結びついている。

上記で見てきたように、モスクは言説実践を通じて、それぞれの〈スケール〉の影響を受けた物質的特徴を有するようになった。翻って、この物質的特徴は、モスクを様々な〈スケール〉を用いて形容することの妥当性を与えている。地元産の素材の使用は、〈ストラスブール〉〈アルザス〉〈ヨーロッパ〉などの表象を物質的なものへと昇華し、内部装飾は、〈モロッコ〉との結びつきを反映すると同時に強化する。この物質性と言説の

第6図 大モスク内部の装飾

Figure 6. Interior decoration of Grand Mosque
(2014年9月筆者撮影)

相互作用において、「スケールのパフォーマティヴィティ」が発揮されている。次章では、モスクの利用過程においてスケール言説がいかに再構築されているかを検討する。

V 経験されるモスクと言説の再構築

空間を終わることのない他者との交渉の「プロセス」として捉える視座に立てば、モスクは完成した後も、利用され表象されることによってその意味付けや存在意義が変化する「つねに構成の過程にあるもの」（マッシー、2014）だと言える。完成したモスクはどのように人々に経験され、そのことが「スケールの政治」とどのように関わっているのだろうか。

まず、モスクは信徒だけでなく、非ムスリムにも開かれた場所として経験されている。モスクが完成した際の感慨を語るGMSメンバーC氏は、モスクがストラスブール市民全体のためにあることを強調する。

それ（筆者注：モスクの完成）は、ストラスブール市にとって、ムスリムにとって、また非ムスリムにとっての偉大なお祝いであり、勝利だった。なぜなら、これはストラスブールのモスクだから。よそから来たのではなく、ストラスブールで生まれたモスクなのだ。³⁵⁾

モスクは礼拝の時間外であれば、非ムスリムの見学者や観光客も受け入れており、見学ガイドも提供している。モスクの内部には訪問者向けの注意書きがフランス語、英語、ドイツ語の三言語併記で貼りだされており、訪問者の存在に配慮していることが窺える。当時の地元新聞の記事は、モスクが多く訪問者を受け入れていることを明らかにしている。

落成式から3か月、ストラスブールのモスクを発見（découvrir）しにやってくる訪問者

35) 2014年9月、GMSメンバーC氏へのインタビューより抜粋。

はますます増えている。それは、地域全域で、あるいは地域を超えて、自分の学級を連れてくる教員や、教会のグループ、あるいは文化団体の関心をひいている。モスクのボランティアガイドの一人によると、この3か月で4,000人が来訪した。³⁶⁾

近くの道路標識にもモスクの名前は記載され、ストラスブールの観光マップにもモスクの位置が示されている。C氏もまた、人々のモスク訪問が、非ムスリムがイスラームを「発見」する契機になることを、期待も交えて述べる。

人びとはモスクを発見し、訪れるようになった。(中略) このモスクは人々が(筆者注: イスラームに対して)抱くイメージと異なるイメージを示す。メディアは大きな被害をもたらすが、このモスクはそれでも何千もの人々の訪問を可能にする。彼らは敬虔であるかないかに拘わらず、モスクを訪れ、見て、そしてイスラームやムスリムに対する見方を変える。³⁷⁾

また、GMSは一般市民向けのイベントに積極的に場所を提供している。宗教間交流の音楽コンサート「サクレ・ジュルネ」は、教会やシナゴグなど市内の様々な宗教施設を借りて、多様な宗教にちなんだ音楽家グループを招聘しているが、GMSも毎年このコンサートに場所を提供しており、当日は大モスクの礼拝室がコンサート会場に変身する(第7図)。欧州評議会と欧州委員会が促進する「ヨーロッパ文化遺産の日」というイベントにも参加し、一般客への館内ガイドを行っている。GMSは、大モスクを一般市民に開き、来訪者を受け入れることで、〈ストラスブール〉や〈ヨーロッパ〉の一員として存在感を示す。いま

第7図 大モスクにおける宗教間交流コンサート

Figure 7. Interreligious concert at the Grand Mosque

(2018年2月撮影, 「サクレ・ジュルネ」開催団体メンバーのLilia Bensedrine-Thabet氏提供)

や大モスクは、それぞれの〈スケール〉によって示されるものの構成物の一つとして組み込まれており、スケール言説を再構築するのに貢献している。

建設過程では他の〈スケール〉に比べて存在感が小さいように思えた〈ナショナル〉性は、モスクの落成式に呼ばれた当時の内相の演説において、ひと際強調されている。当時の内相マニュエル・ヴァルス(社会党)は、まず、前半部分でモスクの完成にお祝いを述べ、アルザスの寛容性をたたえたうえで、ライシテが宗教に否定的なものではなく、逆に宗教を保護するものであることを訴える。後半部分は、すべてのフランスのムスリムへのメッセージとなり、共和国的価値を受け入れることの重要性を説いている。ちなみに、この演説でヴァルスは「フランスのイスラーム (Islam de France)」という語を14回も使用している³⁸⁾。以下に一例を引用する。

今日我々が落成式を執り行ったこの大モスクは、フランスのイスラームという美しい建築物に運ばれた切り石なのである。³⁹⁾

36) *Dernières Nouvelles d'Alsace*, 2013年1月5日の記事。

37) 2014年9月, GMSメンバーC氏へのインタビューより抜粋。

38) 「フランスのイスラーム (Islam de France)」とは「フランスにおけるイスラーム (Islam en France)」より進展し、フランスの社会制度に即して組織化され、諸外国から完全に独立し、フランス的価値観を尊重するイスラームのことを意味しており、メディアや政治の場で頻繁に使用されるスローガンである。

ストラスブールに限らずフランスでは、都市の大モスクは象徴的に「フランスのイスラーム」として表象されることがある（Maussen, 2007）。CFCM やムスリム団体への干渉を通じて、国家はイスラームを統制しようと画策しており、モスク建設はフランス政府による自国のイスラームの統制装置としても作用しうることに留意したい。

一方、大モスクの運営に対するモロッコ政府の影響も無視できない。GMS は、モロッコ政府との取り決めにより、金曜礼拝時の説教師をモロッコから派遣してもらい、給与を支払っている。モスクはフランス在住ムスリムに対する自らの影響力増加を図る、外国政府による干渉の場ともなりうる。このような状況下にある「ストラスブールの大モスク」に対し、その代表性を疑問視する声も多い。

建設した団体がムスリム・コミュニティ全体を代表するものでないことは明白である。トルコ系には Meinau 地区に別のモスクがあり、たくさんの他のモスクが作られている。中心的と言われるこのモスク（筆者注：ストラスブールの大モスク）は、必ずしもストラスブールのすべての団体を代表するものではない。⁴⁰⁾

ストラスブールを代表するような大モスクの建設を目指した GMS は、結局、すべてのムスリム団体からの支持を得ることはできなかった。GMS メンバーもこのことには自覚的である。

計画が全てのストラスブールのムスリムたちを結集させることはできなかった。それは不可能であり、今も満足していないムスリムはいる。⁴¹⁾

この不確かな代表性は、他のムスリム団体の対抗心を煽り、新規のモスク建設計画の活発化を招いている。「ストラスブールの大モスク」の完成後、市からの公的資金援助を受けた二つの大モスクが新たに建設され、さらに現在進行形で建設中のモスクも存在する⁴²⁾。建設中のモスクの一つはトルコ系団体である「アイユブ・スルタン・モスク」だが、その新たなモスクは、完成すれば「ストラスブールの大モスク」よりも大きく、トルコ風のミナレットが付いたモスクになるという。大モスクの建設は、ストラスブール市全体の景観変化にも大きく寄与している。

利用者である信徒たちにとっては、大モスクはどのような存在なのか。礼拝所が数多あるなかで、日常的に「ストラスブールの大モスク」に好んで通う理由を数名の信徒に尋ねた結果、「バス停のすぐ近くで交通の便がいいから」、「高校のすぐ近くだから」、「大学のキャンパスのすぐ近くだから」、「すぐ近くに住んでいるから。別にどこのモスクでも構わない」といった回答を得た。どのモスクに行くかに関しては、生活圏内にあることや、アクセスのしやすさ、といった利便性が重要な指針となっていることがわかる。複数のモスクに通っている人も珍しくなく、信徒の一人は、「モスクはアッラーの家」であると表現する。一般信徒には、モスクは〈家〉や〈近隣〉といった、より身近な〈スケール〉と関連付けられて経験されている。

大モスクが様々な〈スケール〉と関連付けられることで、それぞれの〈スケール〉に対する地理的想像力は強化されている一方、全体として見れば、その影響力は、他の〈スケール〉によって相

39) 2012年モスク落成式でのヴァルス内相（当時）による演説、フランス内務省ホームページ *Ministère de l'Intérieur* (2012) より抜粋。

40) 2014年9月、SERS 職員 H 氏へのインタビューより抜粋。

41) 2014年9月、GMS メンバー L 氏へのインタビューより抜粋。

42) Robertsau 地区にモスクが2015年に完成、Haute-pierre-Poteries 地区にミナレットを備えたモスクが2017年に完成している。さらに別のトルコ系のモスクが Meinau 地区に建設される予定である。

対化されているとも言える。この点で、大モスクにおける経験を通じて生まれる新たなスケール言説は、重層的あるいは混淆的なスケール観を呈しており、従来のスケール認識を不安定化する「ずれや亀裂」(Kaiser and Nikiforova, 2008: 543)をもたらしている。

VI おわりに

本稿では、「スケールのパフォーマティビティ」という観点から、「ストラスブールの大モスク」建設という具体的事例において、〈スケール〉の反復的な言説実践によって実質的效果が生まれる過程を分析することを試みた。諸アクターによっていかに言説上の「スケールの政治」が展開したか、および〈スケール〉を用いた言説実践が大モスクの物質性にいかに影響をもたらしたかを考察し、完成した大モスクがどのような〈スケール〉と関連づけられて経験されているかを示した。

大モスクをめぐる言説において複数の〈スケール〉が登場した理由として、第一に、建設資金源が信徒、市、県、地域圏、諸外国政府、と様々な個人および統治機関から拠出された点が挙げられる。大モスク建設を主導したアクターがモロッコ出自のイスラム移民という「トランスナショナル」な存在であったことに加え、ストラスブール市では、アルザス・モーゼル地方法を活用してイスラムの要望に応えようとする政治的気運が高まっていたことが、資金源の多様化に繋がった。第二に、ストラスブールという街自体が、多様な〈スケール〉によって表象される歴史的特徴を有していた点が挙げられる。スケール言説が生じる背景には、以前からの反復的な言説実践によって、既にある程度実体化したスケールの影響があることを忘れてはならない。

また、本稿の分析において、アクターや状況に

応じて登場する様々なスケール言説は、「ここ」と「よそ」の区別に結び付いていることが示された。例えば、建設過程で諸アクターによって強調された〈ストラスブール〉〈アルザス〉〈フランス〉〈ヨーロッパ〉という表象は、モスクが「ここ」由来のもの、つまり「インサイダー」であることを証明するために用いられ、モスクの物質面や利用方法に影響している。それは「モロッコ」という地との関わりが重要な影響を及ぼしながらも積極的に言及されないことと対照的である。〈モロッコ〉には「よそ者」や「アウトサイダー」というイメージが付与されており、〈モロッコ〉性の顕示はモスクの正当性に疑義を挟む余地を与えかねない。ただし、この「ここ／よそ」の境界線は、曖昧で可動的である。時に〈ストラスブール〉や〈アルザス〉が、言説上で〈フランス〉に対置させられることも、〈ヨーロッパ〉に関連付けられることもある。

以上の観点から見れば、様々な〈スケール〉に結びつけられる「ストラスブールの大モスク」という場所自体が、固定的なスケール認識に挑戦しつつ、「ここ」と「よそ」の境界を問い直していると言えるかもしれない。GMS メンバー D 氏の語りは、「よそ者」として扱われてきた自分が、「ここ」に根付いていく契機としてモスク建設を捉えている。

今では、イスラムはここにいる。つまりそれは可視的であるということ。見られるということは、認知されるということ。イスラムはもうよそ者ではない。(中略) 私が自分の死を埋葬するこの地において、私は自分のモスクを建てる。私はここから来たのであり、よそから来たのではない。⁴³⁾

フランスにおけるモスク建設をめぐる「スケールの政治」は、「ここ」を動的で混在的な場として再概念化するための試みの一つを形成してい

43) 2014年9月、GMS メンバー D 氏へのインタビューより抜粋。

る。空間の再概念化に取り組んだマッシー (2014: 265) が「空間的な物語の数々が出会う、あるいはそれぞれ独自の時間性をもつ諸軌跡の配置や結合を形成する場」として「ここ」を捉えなおしたように、ストラスブールのムスリムたちも、様々なスケール言説を通じて、既存のスケール認識を塗り替え、「ここ」を作り変えている。その試み一つ一つの積み重ねが、「イスラーム化の神話」に対する対抗言説を構築していくのではないだろうか。

[付記] 本稿は2015年1月にお茶の水女子大学に提出された修士論文に基づき、また、2015年11月15日に大阪大学で開催された人文地理学会大会での口頭発表の内容を改変したものである。本稿を執筆するにあたり行った調査の一部はお茶の水女子大学グローバル協力センターの「平成26年度平和構築分野に関する国際調査」プログラムの助成を受けて実施した。本稿作成にあたり、お茶の水女子大学の諸先生方、院生諸姉をはじめ、多くの方にご指導をいただきました。また、調査にご協力いただいた方々との対話が本稿の基盤となっています。この場を借りて厚く御礼申し上げます。

文 献

- 麻生 将 (2016). 近代日本におけるキリスト教集団をめぐる排除の景観—1930年代の二つの排撃事件を事例として—. *E-journal GEO*, **11**(1), 219–243.
- 石丸純一 (1993). アルザスにおけるイスラーム運動—ストラスブールのトルコ人ムスリムを中心に—. 昭和薬科大学紀要, **27**, 137–157.
- ウェルベック, M. (大塚桃訳) (2015). 『服従』河出書房新社.
- 小泉洋一 (1998). 『政教分離と宗教的自由—フランスのライシテ』法律文化社.
- 佐藤香寿実 (2016). フランス・アルザス地方の「コンコルドートのライシテ」と非公認宗教としてのイスラーム. 上智ヨーロッパ研究, **8**, 61–81.
- 伊達聖伸 (2010). 『ライシテ, 道徳, 宗教学—もうひとつの19世紀フランス宗教史—』勤草書房.
- テイラー, P. J. (高木彰彦訳) (1991). 『世界システムの政治地理 [上]—世界経済, 国民国家, 地方—』大明堂.
- 手塚 章 (2006). 国境都市からトランスボーダー都市へ (1)—ストラスブールの事例—. 人文地理学研究, **30**, 113–125.
- 中本真生子 (2008). 『アルザスと国民国家』晃洋書房.
- ボベロ, J. (三浦信孝・伊達聖伸訳) (2009). 『フランスにおける脱宗教性の歴史』白水社.
- マッシー, D. (森 正人・伊澤高志訳) (2014). 『空間のために』月曜社.
- 丸山真央 (2012). 国家のリスケージングと都市のガバナンス. 社会学評論, **62**(4), 479–488.
- 山崎孝史 (2011). 知事・市長意見交換会の言説分析からみた大阪都構想. 市政研究, **173**, 84–94.
- 山崎孝史 (2013). 『政治・空間・場所—「政治の地理学」に向けて—(改訂版)』ナカニシヤ出版.
- Abdoun, K., Chevre, M., Al Atyaoui, A., and Faïk, A. A., eds. (2004). *Histoires de mosquées: Recueil de témoignages*. Kalima.
- Bowen, J. R. (2010). *Can Islam be French?: Pluralism and pragmatism in a secularist state*. Princeton University Press.
- Brenner, N. (1999). Beyond state-centrism? Space, territoriality, and geographical scale in globalization studies. *Theory and Society*, **28**(1), 39–78.
- Butler, J. (1993). *Bodies that matter: On the discursive limits of 'sex'*. Routledge.
- Cesari, J. (2009). Islam in the West: From immigration to global Islam. *Harvard Middle Eastern and Islamic Review*, **8**, 148–175.
- Cox, K. (1998). Spaces of dependence, spaces of engagement and the politics of scale, or: Looking for local politics. *Political Geography*, **17**(1), 1–23.
- Delaney, D. and Leitner, H. (1997). The political construction of scale. *Political Geography*, **16**(2), 93–97.
- Dhume, F. (2012). Communautarisme. In Laacher, S., ed. *Dictionnaire de l'immigration en France*. Larousse, 150–153.
- Donnet, C. (2014). Organisations musulmanes et pouvoirs locaux: concurrence et normalisation par l'« islam civil » à Strasbourg. In Lamine, A. S., ed. *Quand le religieux fait conflit. Désaccords, négociations ou arrangements*. Presses Universitaires de Rennes, 33–45.
- Frégosi, F. (2001). « Droit de cité » de l'Islam et politiques municipales: analyse comparée entre Strasbourg et Mulhouse. In Frégosi, F. and Willaime, J. P., eds. *Le religieux dans la commune*. Labor et Fides, 92–137.
- Haenni, P. and Lathion, S., ed. (2009). *Les minarets de la discorde*. Infolio.
- Herod, A. and Wright M. W., ed. (2002). *Geographies of power: Placing scale*. Blackwell.
- Howitt, R. (2002). Scale and the other: Levinas and geography. *Geoforum*, **33**(3), 299–313.
- Jones, K. T. (1998). Scale as epistemology. *Political Geography*, **17**(1), 25–28.
- Kaiser, R. and Nikiforova, E. (2008). The performativity

- of scale: The social construction of scale effects in Narva, Estonia. *Environment and Planning D: Society and Space*, **26**(3), 537–562.
- Lamine, A. F. (2006). Les foulards et la République. *Revue des Sciences Sociales*, **35**, 154–165.
- Laurence, J. and Vaïsse, J. (2007). *Intégrer l'Islam: La France et ses musulmans, enjeux et réussites*. Odile Jacob.
- Liogier, R. (2012). *Le mythe de l'Islamisation: Essai sur une obsession collective*. Seuil.
- MacKinnon, D. (2010). Reconstructing scale: Towards a new scalar politics. *Progress in Human Geography*, **35**(1), 21–36.
- Marston, S. A., Jones III, J. P., and Woodward, K. (2005). Human geography without scale. *Transactions of the Institute of British Geographers*, **30**(4), 416–432.
- Maussen, M. (2007). Islamic presence and mosque establishment in France: Colonialism, arrangements for guestworkers and citizenship. *Journal of Ethnic and Migration Studies*, **33**(6), 981–1002.
- Moore, A. (2008). Rethinking scales as a geographical category: From analysis to practice. *Progress in Human Geography*, **32**(2), 203–225.
- Muller, L. (2009). *Les résidents étrangers à Strasbourg*. Presses Universitaire de Strasbourg.
- Roy, O. (2002). *L'Islam mondialisé*. Seuil.
- Schnapper, D. (1991). *La France de l'intégration*. Gallimard.
- Smith, N. (1992). Contours of a spatialized politics: Homeless vehicles and the production of geographical space. *Social Text*, **33**, 54–81.
- Smith, N. (2000). Scale. In Johnston, R. J., Gregory, D., Pratt, G., and Watts, M., eds. *The dictionary of human geography, 4th edition*. Blackwell, 724–727.
- Smith, N. (2008). *Uneven development: Nature, capital, and the production of space*. University of Georgia Press.
- Swyngedouw, E. (2004). Globalisation or 'glocalisation'? Networks, territories and rescaling. *Cambridge Review of International Affairs*, **17**(1), 25–48.
- Taylor, P. J. (1981). Geographical scales within the world-economy approach. *Review*, **5**(1), 3–11.
- Taylor, P. J. (1982). A materialist framework for political geography. *Transactions of the Institute of British Geographers*, **7**(1), 15–34.
- Le Monde (2012). https://www.lemonde.fr/idees/article/2012/02/10/pourquoi-je-suis-alsacien-laic-et-pour-le-concordat_1641684_3232.html. 'Pourquoi je suis alsacien, laïc et pour le Concordat' (2018年10月31日閲覧).
- Ministère de l'Intérieur (2012). <http://www.interieur.gouv.fr/Archives/Archives-Manuel-Valls-mai-2012-avril-2014/Interventions-du-Ministre/Inauguration-de-la-Grande-mosquee-de-Strasbourg>. 'Interventions du Ministre: Inauguration de la Grande mosquée de Strasbourg' (2018年10月31日閲覧).